

雪裡地区の自然再生計画案について

1. これまでの取組経緯
2. 雪裡地区の特徴
3. 実施の方向性

1. これまでの取組経緯

1-1. 自然再生全体構想の目標

- ◆ 「釧路湿原自然再生全体構想」(2005年(平成17年)3月(2015年3月改定))では、**ラムサール条約登録前のような湿原環境**を目指す姿とし、「湿原生態系の質的量的な回復」において、以下の目標を設定している。
- ◆ 湿原面積の減少に歯止めをかけて、**現在(2000年(平成12年)当時)の湿原面積を維持**する。
- ◆ 各小委員会では、右図のように目的や実施内容・実施箇所を設定し、取組を進めていくこととしている(第2回自然再生協議会資料H15.12)。



[河川環境再生小委員会：蛇行する河川への復元]

- ・ 釧路川本川茅沼地区(試験地)
- ・ 幌呂川、**雪裡川**、ヌマオロ川、オソベツ川

[土砂流入小委員会：土砂調整地による土砂流入防止対策]

- ・ 久著呂川(モデル地区)
- ・ 幌呂川、**雪裡川**、ヌマオロ川、オソベツ川、釧路川

1-2. これまでの取組経緯と雪裡地区の位置

◆ 下図の①～④の事業を進めてきた。雪裡地区は5箇所目の取組となる。(釧路開建治水課の取組のみ記載)



釧路開建治水課の取組を記載

1-3. 全体構想における雪裡地区の位置づけ

◆ 全体構想では、雪裡地区は土砂流入対策、湿原再生、旧川復元の施策が位置づけられていることから、これらの対策に取り組む。(第2回自然再生協議会資料により作成)。

施策	取組	具体的施策	対策箇所	対策状況 (2024年現在)
土砂流入対策	土砂調整地による土砂流入の防止	土砂調整地	釧路川	旧川復元で実施済
			雪裡川	
			幌呂川	
			久著呂川	実施中
			オソベツ川	
湿原再生	湿原の再生 (湿原植生の制御を含む)	相対的な地下水位の回復	幌呂地区	実施中
		農地跡地の湿原再生	釧路川	モニタリング中
			広里地区	実施済
旧川復元(幌呂川・雪裡川)	雪裡川			
野生生物	生物の生息環境の把握と保全	タンチョウやキタサンショウウオ、イトウ、ヤチボウズなどの生物を指標として生息環境を把握する。	釧路湿原全域	
旧川復元	直線河道の再蛇行化	過去に直線化された河川を可能な限り蛇行した河川に復元	釧路川	実施済
			幌呂川	
			雪裡川	
			ヌマオロ川	実施中
			オソベツ川	

1-4. 第29回自然再生協議会 (R5.3.10) 決定内容

- ・次年度以降の自然再生検討河川（候補）を雪裡川とする

旧川復元対象河川は、『釧路湿原の河川環境保全に関する検討委員会』において、現実的に復元可能な河川として次の3つの観点から選定された。

- ・旧河道跡が多く残っており、復元が可能なこと
- ・周辺の土地利用が少ないこと
- ・湿原流入河川で河川区域内の延長が比較的事あること

旧川復元対象5河川

このような観点から、釧路川茅沼地区やヌマオロ川など5河川が選定されている。

<これまでの調査・検討経緯について（第1回旧川復元小委員会資料より）>

現状で湿原への流入土砂量が多い河川で対策を行うことが湿原保全に最も効果的である河川を旧川復元調査検討河川の候補とする。

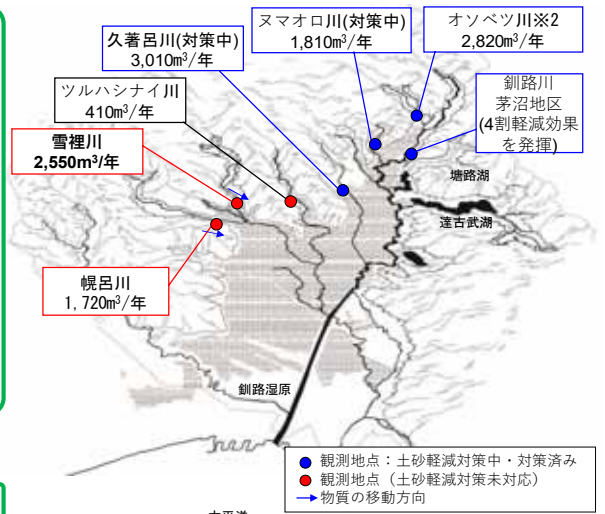


図2 各支川からの湿原流入土砂量

※1 釧路湿原流入河川における年間土砂流入負荷は「釧路湿原自然再生全体構想 2015年3月改定」より引用

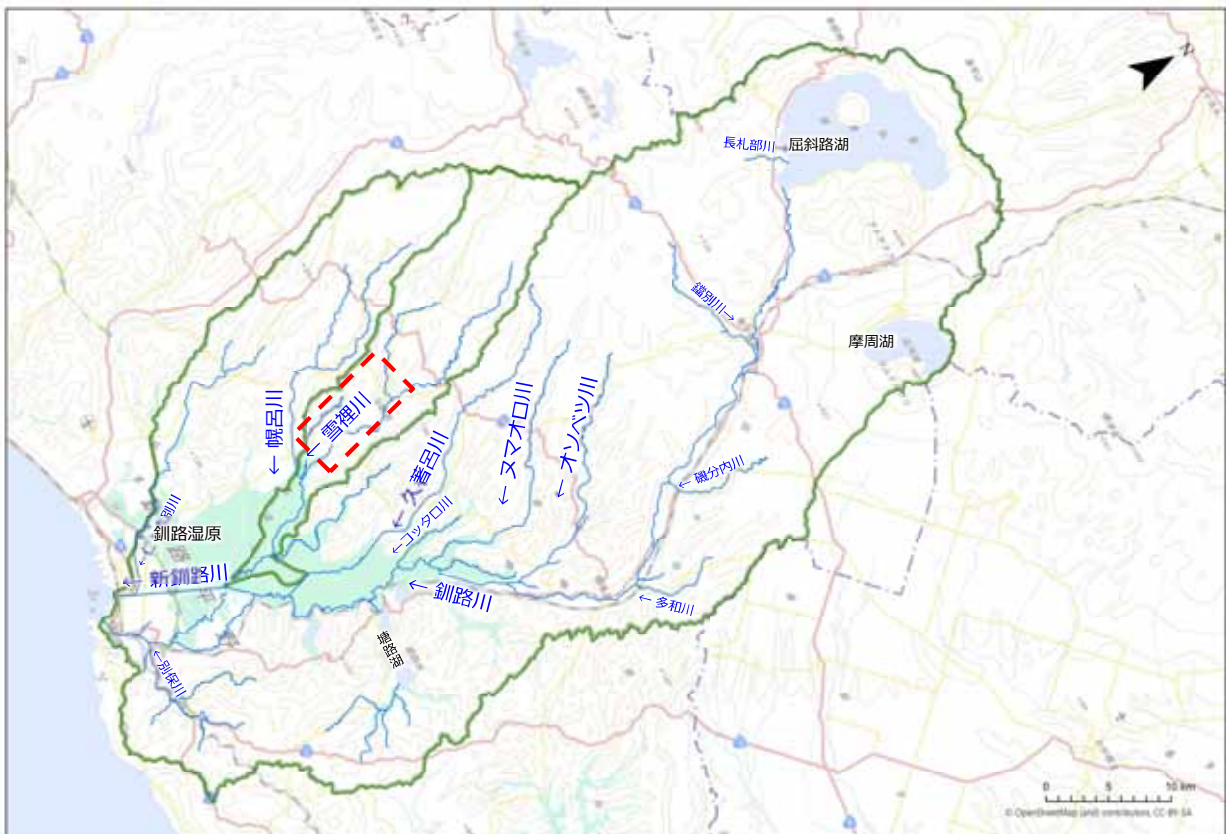
※2 オソベツ川では土砂軽減対策は行われていないが、釧路川に流入後、茅沼地区において釧路川と一体で土砂軽減が図られている

未対策の河川において、最も湿原への土砂流入量が多い**雪裡川**を候補とし、新たな自然再生の調査・検討を進める

2. 雪裡川の特徴

2-1. 雪裡川流域

- ◆ 雪裡川は、鶴居丘陵を流下し釧路湿原に西側から流入する流域面積511.6km²、幹川流路延長59.8kmの河川である。



2-2. 雪裡地区の変遷

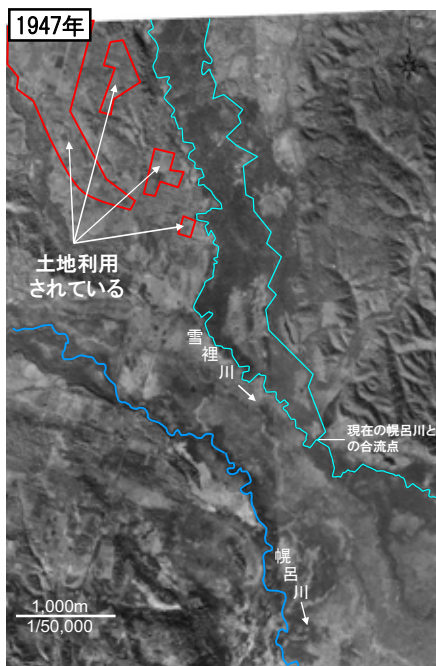
◆ 1973年～1979年に雪裡川が明渠排水路として整備され、直線河道となった。



もとの雪裡川と鶴居芦別川の合流点から上流側を鶴居芦別川、下流側を旧雪裡川と呼ぶ

2-3. 雪裡地区周辺の土地利用の変化

◆ 1973年～1979年に雪裡川が明渠排水路として整備された後に河道周辺の農地整備が進展した。



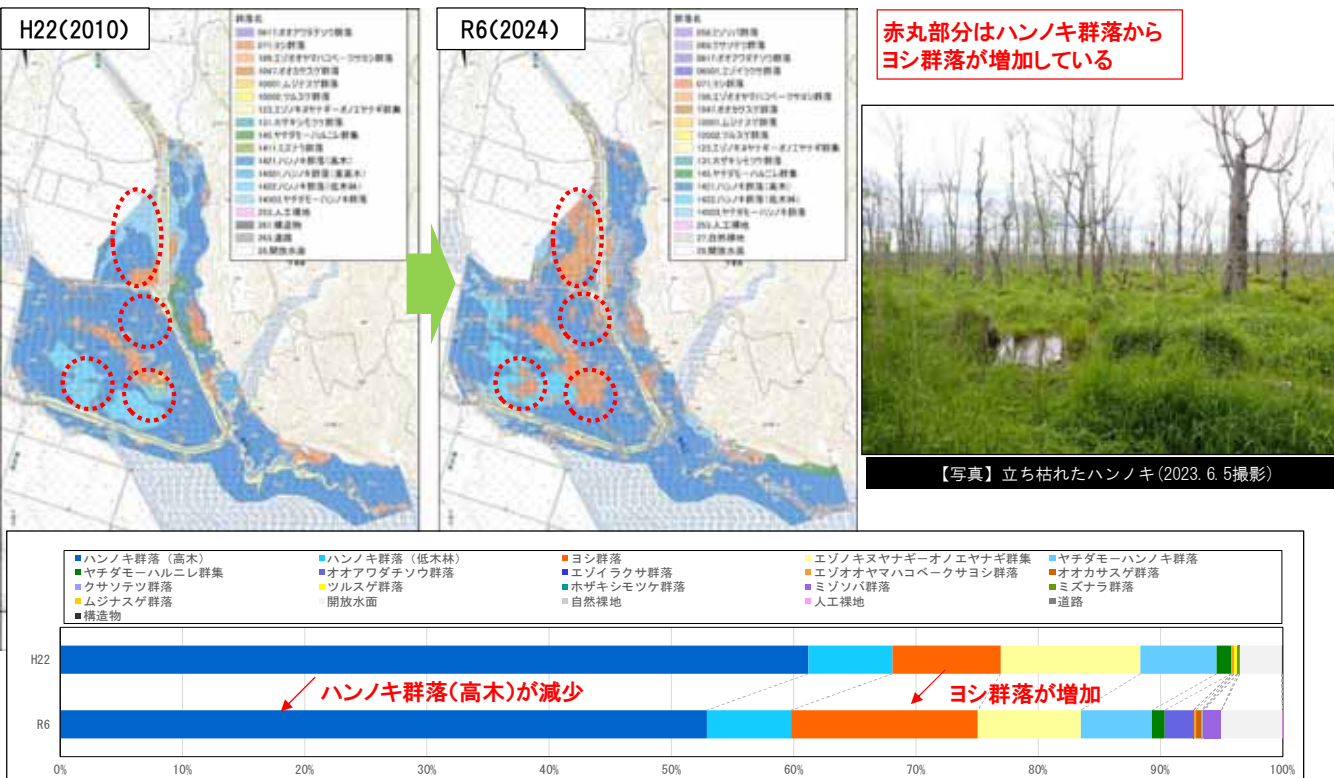
• 雪裡川は蛇行した河川であった。

• 雪裡川は1973年～1979年の直轄明渠排水事業により直線河道となった。
• 音羽橋周辺では農地開発が進展した。
• 幌呂川が切替えられ雪裡川に接続した。

• 排水路整備後に、雪裡川沿いの湿原でも農地開発が進展した。

2-5. 湿原植生に関する現状（雪裡地区）

- ◆ 近年は、雪裡川右岸の一部の区域で、ハンノキ群落の立ち枯れがみられる。
- ◆ 植生の変化は、雪裡川の明渠排水路整備後に土砂堆積が進行したことによる河床上昇が要因となり、河川水位が上昇し、周辺の冠水頻度や地下水水位が上昇したためと推察される。



2-6. 土砂に関する現状（雪裡地区）

- ◆ 雪裡川は、明渠排水路整備後に土砂堆積が進行し河床高が上昇した。明渠排水路整備直後は排水機能を発揮していたが、現在は土砂堆積が進行してきている。



表 各年代の河床上昇量

	KP0.0~1.4 水面幅約15m	KP1.4~3.0 水面幅約50m	KP3.0~4.0 水面幅約35m	全区間
明渠掘削1979年	平均0.38m(約0.02m/y)	平均1.07m(約0.06m/y)	平均2.06m(約0.05m/y)	平均2.02m(約0.05m/y)
1997年	平均1.19m(約0.04m/y)	平均1.32m(約0.05m/y)		
2023年				

